

没後120年記念 特別展「林忠正書簡展」出品目録

〔会期：令和8年(2026)7月25日(土)～10月4日(日)〕

現高岡市一番町出身の美術商・林忠正(1853～1906)は、長年パリで画商として活躍し、ヨーロッパに浮世絵などの日本美術を紹介するなど、東西美術交流に多大な貢献を果たした人物です。令和8年(2026)は林忠正の没後120年となる節目の年にあたります。

本展では若かりし忠正が高岡の実家・長崎家に送った書簡（高岡市立中央図書館蔵）を中心に展示し、忠正の知られざる一面を紹介します。

また、特別出品として2026年4月5日に高岡市美術館に建造された檜原北悠作「林忠正胸像」の樹脂原型（林忠正銅像制作委員会寄贈）のほか、木々康子氏（忠正義孫、作家、忠正研究者）所蔵の忠正著『高岡銅器維持ノ意見』（1886年／北陸初公開）や1900年パリ万博事務官長としての活躍に対しフランス政府から贈られた「レジオン・ドヌール コマンドール(3等)勲章」など貴重な資料も展示・紹介します。

最後に、本展開催にあたりご所蔵資料をご出品いただきました木々康子様をはじめ、高頭麻子様（同展協力）、林忠正銅像制作委員会（同展協賛）、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
1		林忠正肖像（写真）	明治後期	1	明治期の美術商。町医者（蘭方外科）・国学者の長崎言定の二男として、越中高岡一番町（現富山県高岡市一番町）に生まれる。幼名は志芸二。明治3年富山藩大参事・林太仲の養嗣子となり林忠正と改名。直ちに上京し、仏語塾を経て大学南校（のち東京大学）に学ぶ。同11年大学を退学し、起立工商会社社員として渡仏。パリ万博の仕事に携わる。同17年パリに若井兼三郎と共同で美術商を開業（のち独立）、浮世絵など日本・東洋美術品を扱う。パリを中心にゴンクールや印象派の画家たちと広く交友。当時盛行したジャポニスムに、日本美術紹介者として重要な役割を果たした。19年『高岡銅器維持ノ意見』を著し、『パリ・イリュストレ（日本特集号）』を編集。31年、伊藤博文・西園寺公望の信任が厚く2年後のパリ万博の事務官長を民間人で初めて任命される。日本文化を系統的に海外へ紹介し、仏政府より教育文化功労章1等・2等、レジオン・ドヌール（コマンドール）3等勲章を授与される。翌34年、勲4等旭日小綬章を受章。35年商店を閉じ、翌年かけ売り立てを行う。金鉱山開発事業などを計画していたが、39年病没。墓は現東京都台東区谷中の本寿寺（日蓮宗）に置かれた後、昭和37年に千葉県八千代霊園に改葬され、現在は横浜の「八景苑」（横浜市金沢区六浦町）にある。享年52	個人
2		長崎・林・磯部家家系図〔複写〕		1	長崎家のほか、林家、磯部家の家系図。（出典）木々康子・高頭麻子編著『美術商・林忠正の軌跡 1853-1906』（藤原書店、2022年）	当館
3		ガラス乾板「父（長崎言定）と千秋一郎・入江鷹之助と共に」（写真）	明治5年(1872)1月	1	大学南校（のち東京大学）時代の写真。左より入江鷹之助、忠正、父、千秋一郎。入江と千秋は旧富山藩費留学生仲間	木々康子氏
4		長崎言定肖像（写真）	（生没年）文政9～明治7年(1826～1874)	1	忠正の父。蘭方医・長崎家6代で国学者。5代浩斎（愿禎）の長男。幼名は周蔵。諱は正国。号は秋江。京都の究理堂（小石元瑞）で学び、帰郷後が家業の傍ら、五十嵐篤好に国学等を学ぶ。維新後は親戚で忠正の養父で富山藩大参事・林太仲の關係で富山藩に仕えた。高岡の関野神社・射水神社で神職を務めた	－
5	●	林志芸二（忠正）書簡（長崎言定宛）	年未詳〔明治6～7年(1873～74)ヵ〕2月25日	1	言定は忠正父（長崎家6代）。父より注文を受けていた、女流南画家の大家・奥原晴湖(1837～1913)が描いた不忍池の風景画ができたので送ると伝えている。筆記体の「H」と「S」を重ねた忠正のサインがある。No.5,6,9,10,13,15の宛名は「長」となっている。「長崎家文書」のうち、No.456書簡-12	高岡市立中央図書館
6	●	林志芸二（忠正）書簡（長崎正国宛）	明治7年(1874)1月22日	2	正国は忠正父（言定）。『医事雑誌』3編（坪井信良編。1873年11月創刊）を坪井本人より直に贈られたことについて。坪井は長崎家と親戚で、佐渡家出身の蘭方医。また昨年末に林家の養母が娘を早産で亡くしたこと。弟・正辰の進学のこと。新聞を今後送るが、その利点を種々記し、例として8日前の岩倉具視暗殺未遂事件（喰違の変）などを伝えている。「長崎家文書」のうち、No.456書簡-1	高岡市立中央図書館
7		坪井信良肖像（写真）	（生没年）文政6～明治37年(1823～1904)	1	蘭方医。高岡利屋町の町医（産婦人科）8代佐渡養順次男。母は長崎家4代玄庭（蓬洲）娘・くら。京都の小石元瑞、江戸の坪井信道に学び、坪井家の養子となる。福井藩医を経て幕府奥医師、静岡病院頭並、東京府病院総取締などを務めた。明治6年11月に日本で2番目の医学雑誌『医事雑誌』を編集、同8年12月まで43号を出版した	－
8	●	林志芸二（忠正）書簡（長尊厳大人宛）	明治7年(1874)1月28日	2	長尊厳大人は忠正父（言定）。同年の忠正次弟・三造（正辰）は東京外国語学校（現・東京外国語大学か）に入学し、その勉学や服装などについて。忠正同窓の現・新潟県出身の司法官僚・政治家で、同6年同校助教師となった渡辺康吉の苦学していること等について伝えている。「長崎家文書」のうち、No.458書簡-1	高岡市立中央図書館

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
9	●	林志芸二（忠正）書簡（長崎元貞等宛）	明治7年(1874)2月1日	2	元貞は忠正兄（長崎家7代）。先日依頼を受けた時計の修理が終わったので送付する、一昨日、佐渡家出身の蘭方医・坪井（信良）氏が忠正の元を訪れた際に、医学雑誌『医事雑誌』（同6年11月創刊）が思いのほか好評でよく売れていることなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No457書簡-1	高岡市立中央図書館
10	●	林志芸二（忠正）書簡（長崎母・兄宛）	明治7年(1874)4月28日	1	忠正の母（もと）・兄（元貞）宛。追伸に「川上氏、佐渡氏」。4月23日付で父（言定）大病の知らせを受け、すぐにも帰郷したいが、養父・林太仲の「心配だがこの手紙ではよく分からない。2、3日様子を見てはどうか」との言葉に従うとある。私は他家の養子であり「二父の軽重は養父を以て重とす」で、耐えがたいがやむを得ない。だが呼び出し状が来たらすぐに駆け付けるとある。「長崎家文書」のうち、No456書簡-4	高岡市立中央図書館
11		林太仲肖像（写真）	〔生没年〕天保10～大正5年(1839～1916)	1	忠正の養父で、富山藩大参事。富山藩士・林英尚長男。明治3年長崎家より忠正を養子に迎えた。同年富山藩大参事に就任し、藩政改革に着手。領内約400カ寺の寺院を一宗一寺の七カ寺に合併する《合寺》を断行。過激なため批判が集中し、翌年廃藩に際して罷免された。同5年からは奈良県視学や文部省大視学も務め、同6年以降は全ての公職を辞し、晩雪と号して東京谷中で隠棲した	—
12	●	林忠正書簡（元貞宛）	年未詳〔明治7年(1874)カ〕8月16日	2	元貞は忠正兄。忠正が富山の林家で英尚（義祖父）に言わずに帰京したことで、英尚がひどく腹を立てたようだ。今後、林家から何か言ってくるであろうに心配しなくてよいので、「それはまあ思いもよらぬことでございましたなあ」などと言っておき、私（忠正）に何事も相談してほしいと伝えている。「長崎家文書」のうち、No456書簡-9	高岡市立中央図書館
13	●	林忠正書簡（長崎母・兄等宛）	明治7年(1874)9月5日	5	忠正の母（もと）・兄（元貞）等宛。同年8月27日の忠正父・言定の死を受けて。忠正自身11歳の時からほとんど家におらず、心配ばかりかけて未だ万分の一も恩返しできていない、この上は一日も早く学業を成し遂げたい。また弟正辰に勉学に励み、兄・母を支えよなどと長文で伝えている。「長崎家文書」のうち、No456書簡-6	高岡市立中央図書館
14	●	林忠正書簡（元貞宛）	年未詳〔明治7年(1874)カ〕10月15日	2	元貞は忠正兄。隣家服部老人（高岡市長相当職・服部嘉十郎の父）が重症のため、佐渡家出身の蘭方医・坪井老人（信良）へ尋ねたところ、脊髄衰弱との診断を受けた、布団を3～4枚かけることはせず、居間を開けて換気をするなどして養生することなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No457書簡-7	高岡市立中央図書館
15	●	林忠正・三蔵書簡（長崎母・兄・千里宛）	年未詳〔明治7年(1874)カ〕11月3日	2	三蔵は忠正次弟（正辰）。忠正の母（もと）・兄（元貞）・弟（千里）宛。同年8月27日に父・言定が亡くなり、その供物として菓子2品が送られ、忠正・磯部四郎（忠正の義理の叔父）・三蔵らと配分したこと、磯部と金宗宿（高岡銅器問屋の東京店）で鉄瓶を手に入れたことなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No458書簡-2	高岡市立中央図書館
16		磯部四郎肖像（写真）	〔生没年〕嘉永4～大正12年(1851～1923)	1	司法官・政治家。富山藩士・林英尚4男（忠正の義祖父）。長兄は林太仲。幼少の頃、同藩士・上野宗右衛門の養子となり、のち磯部四郎と改名。明治3年達理堂で仏語を学び、のちフランスのパリ大学留学、日本で2番目の仏法学士となり、帰国後司法省判事となる。同23年第1回衆議院議員選挙で当選。大正12年関東大震災により死去	—
17	●	林忠正書簡（長崎母・兄・姉・丈四郎・橘五郎・周蔵等宛）	明治8年(1875)1月10日	2	忠正の母（もと）・兄（元貞）・姉・丈四郎（忠正弟の千里）・橘五郎（忠正末弟の正倫）・周蔵（忠正甥）等宛。今月4日に届いた為替札10円のうち、8円は三蔵（忠正次弟の正辰）の学資金、50銭は林家分、1円は三蔵分、残り50銭は忠正分として配分したこと、母・姉宛に近々読売新聞を送ることなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No456書簡-8	高岡市立中央図書館
18		開成学校時代の林忠正（写真）	明治8年(1875)3月	1	同年9月、開成学校（のちの東京大学）開校。同校ではフランス人教師によるフランス語での授業が行われた	（原本） 木々康子氏蔵
19		パリ出発前年の林忠正（写真）	明治10年(1877)	1	明治11年（1878）の万博開催前年にパリへ向かう忠正の写真	（原本） 木々康子氏蔵
20		林忠正 パスポート（写真）	明治11年(1878)1月23日	1	日本外務卿・寺島宗則から林忠正宛。忠正の身長や顔の特徴なども細かく記載	（原本） 木々康子氏蔵
21	●	林忠正書簡（林英尚院・林晩雪・富田信英・磯部四郎・長崎元貞・正辰・千里宛）	明治12年(1879)11月3日	5	林英尚院は忠正義祖父、林晩雪（太仲）は忠正義父、富田信英は忠正義叔父。磯部四郎は忠正義理の叔父。元貞は忠正兄、正辰は忠正次弟、千里は忠正弟。同年9月、忠正は佐和正小警視らとの欧州視察の通訳を務めており、各地の文化・風習等について詳細に伝えている。「長崎家文書」のうち、No456書簡-10	高岡市立中央図書館
22		欧州視察 出発時の林忠正（写真）	明治12年(1879)	1	佐和小警視らの欧州視察出発時の忠正の写真	（原本） 木々康子氏蔵
23		「朝夕の戒め」（林忠正から弟宛カ）		1	忠正から弟宛か。高岡町医者（蘭方外科）・国学者である忠正の父・長崎言定の教えを記したものである	木々康子氏
24		三男子を思い母の詠める歌	明治17年(1884)2月5日	1	忠正の母（もと）が3人の息子（忠正・正辰・千里）を思って詠んだ歌	木々康子氏

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
25	◎	林忠正著『高岡銅器維持ノ意見』	明治19年(1886)3月12日	1	高岡銅器の名工・白崎善平が輸出の不況を憂い、パリの忠正に相談し、忠正が答えたもの。忠正がパリで3日徹夜して書いたこの原本は、世界的視野から日本、高岡の現況を批判的に分析し、ただ闇雲に作らず、西洋人（特に富裕層）の好みを研究すべきこと。また適正な費用・価格・形・図案など具体的に詳細な指摘を高い見地から32条にわたり助言している	木々康子氏
26		伊藤博文肖像（写真）	〔生没年〕天保12～明治42年(1841～1909)	1	山口県出身の政治家。吉田松陰に師事し、松下村塾に学ぶ。木戸孝允、高杉晋作らと共に尊王攘夷運動に挺身。大久保利通の死後内務卿を継ぐ。明治15年憲法調査のため渡欧（パリで忠正と親しくなり日本美術問題の上申を受ける）。同18年内閣制度を創設し初代内閣総理大臣に就任。大日本帝国憲法の制定を指導。枢密院議長、貴族院議長、首相(4度)、初代韓国統監等を歴任。同30年、忠正を同33年パリ万博事務官長に抜擢する。同42年ハルビン駅頭で韓国の独立運動家・安重根により暗殺される	(原本) 国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
27		有栖川宮熾仁親王肖像（写真）	〔生没年〕天保6～明治28年(1835～95)	1	有栖川宮第9世。有栖川宮熾仁親王の第1王子。嘉永元年(1848)仁孝天皇の猶子となり、翌年親王宣下。4年仁孝天皇皇女和宮と婚約したが、和宮が徳川家茂に嫁縁のため沙汰止みとなる。幕末以降国事に奔走し、慶応3年総裁職に就任。戊辰戦争では東征大総督となり官軍を率いて東下、江戸に入った。明治10年西南戦争には征討総督として出征、その後陸軍大将、参謀本部長、参謀総長を歴任。同15年渡仏、忠正が通訳を務めた。日清戦争中に病没	(原本) 国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
28		吉原重俊肖像（写真）	〔生没年〕弘化2～明治20年(1845～87)	1	鹿児島県出身の官僚・初代日本銀行総裁。慶応2年(1866)薩摩藩から選ばれて米英両国に留学。留学中の明治5年外務省書記官となり在米日本大使館に勤務、その後大蔵省へ入り、大蔵卿・松方正義の下で活躍した。同13年大蔵少輔（次官）となり、在任中の同15年に日本銀行創立事務委員に任命、日本銀行設立とともに初代総裁に就任、近代的な金融制度の整備に努めた。また同年、憲法調査のため渡仏した伊藤博文とともに、忠正から日本美術問題の上申を受ける。同20年現職のまま43歳で病没	—
29	○	林忠正著『高岡銅工ニ答フル書』	明治19年(1886)3月9日	1	No.25の原本を忠正の依頼で高岡の師・笹原北湖・権九郎父子が推敲し、忠正の弟らにより何冊か浄写され白崎や親戚等に配布されたもの（本資料は長崎家伝来）。忠正は原本で高岡銅器全体の問題としているが、「銅工」と白崎一個人への返書と矮小化された。また忠正は日本美術の将来に危惧を抱き、有栖川宮、伊藤博文らに進言していたが、笹原父子はそれらを理解し得ずに彼らの名や挿図などを全て削っている	当館
30		中国・天津で撮影された林忠正（写真）	明治22年(1889)6月1日	1	別府金七君（竹葉亭店主）へ贈られた写真	(原本) 木々康子氏蔵
31	●	林忠正書簡（元貞宛）	明治26年(1893)3月16日	1	元貞は忠正兄（長崎家7代）。パリより。この度の修造（阿波加脩造の長男か。脩造は8代佐渡養順3男。忠正の祖父の妹の子）の兵役及第（合格）は、大変喜ばしいことなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No.457書簡-4	高岡市立中央図書館
32		阿波加脩造肖像（写真）	〔生没年〕天保6～大正5年(1835～1916)	1	医師・教育者・政治家。8代佐渡養順と長崎くら（浩斎娘）の三男。魚津町の漢方医・阿波加家の養子に入り、緒方洪庵、華岡青洲に学ぶ。コレラ病を治療し、『哥路里贅語』を著す。明治16年魚津明理小学校（現大町小）校長就任。医学教育や児童の育成に尽力した。魚津町連合議長、衆議院議員なども務めた	—
33	●	林三兄弟書簡（兄宛）	明治27年(1894)1月12日	1	忠正三兄弟から忠正兄（元貞）宛。12月16日に忠正が米国ニューヨークを出発し、同月24日夜、仏国パリに無事到着したこと、米国の夏は華氏100度（約37.8℃）の暑さだが、11月末には同10～20度（約-6.7～-12℃）の寒さになることなどを伝えている。弟の千里・正倫の近況報告もしている。「長崎家文書」のうち、No.458書簡-4	高岡市立中央図書館
34		林忠正三兄弟（写真）	明治30年(1897)7月17日	1	パリにて撮影。左から忠正（長崎言定二男）、長崎千里（同四男）、萩原正倫（同五男）	(原本) 木々康子氏蔵
35	●	林忠正書簡（兄宛）	明治34年(1901)10月10日	1	忠正の兄（元貞）宛。300円送る。今年は東京の木挽町へ引越し、半壊の家屋を修復するので経費が非常にかかる。母にはまだ伝えていないが、末弟の正倫がパリで重症の肺病であり、私は急ぎ渡仏することなどを伝えている。「長崎家文書」のうち、No.457書簡-5	高岡市立中央図書館
36		パリ・ケ克蘭邸での林忠正（写真）	明治36年(1903)	1	パリのサン・ルイ島に住むレイモン・ケ克蘭邸で撮影された忠正の写真。日本美術愛好家のケ克蘭と忠正は、明治11年(1878)のパリ万博で出会って以来、親交を深めていた	(原本) 木々康子氏蔵
37		晩年の林忠正（写真）	明治38年(1905)12月	1	パリから帰国後、東京・木挽町の自宅（現新橋演舞場）で撮影された忠正の写真。撮影当日は忠正の満52歳の誕生日であった	(原本) 木々康子氏蔵
38		林忠正の葬列（写真）	明治39年(1906)	1	忠正の葬列の様子。写真中央で婆やに手を引かれて歩くのは忠正の次男・正吉、位牌を持つのは忠正の長男・忠雄。その隣は忠正義父・太仲か	(原本) 木々康子氏蔵
39		浅野総一郎らと石油事業のためのロシア旅行（写真）	明治29年(1896)	1	写真右端は浅野、その隣が忠正。公園で遊ぶロシアの子どもたちとともに	(原本) 木々康子氏蔵

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
40	□	浅野総一郎書簡（林忠正宛）	明治31年(1898)3月5日	1	浅野総一郎(1848～1930)は現富山県氷見市出身の実業家。明治29年、忠正と共にロシアへ石油事業視察旅行をしている（のち忠正は新潟や青森の鉱区に出資）。本書簡では浅野が渋沢（栄一）に相談して、安田（善次郎）の資金を当てに事業を計画していたと思われる。別件で九州へ出発すると伝えており、忠正が浅野と計画していた鹿児島県の金山（菱刈か）開発の件（№28「安達謙蔵書簡（忠正宛）明治38年」）とも思われる	高岡市美術館
41		浅野総一郎書簡（林忠正宛）〔複写〕	年月未詳30日	1	現富山県氷見市出身の実業家・浅野総一郎から忠正宛。西園寺公望と住友（公望弟の公純か）が手紙で言っている船の製造について、ひどく困り果てている状態である、忠正自身久々の帰国で忙しいとは思うが、どうにもならない場合には助けてもらいたいことを伝えている	（原本） 東京都立図書館蔵
42		浅野総一郎肖像（写真）	〔生没年〕嘉永元～昭和5年(1848～1930)	1	現富山県氷見市出身の実業家。医師の子として生まれるが、若くして事業を興す。明治4年に上京、薪炭・石炭などの商売を通じて渋沢栄一の知遇を得、同17年に払い下げられた官営深川セメント工場を浅野セメント(後の太平洋セメント)として発展させる。また同郷の安田善次郎の資金援助を受け、海運・鉱山・造船・鉄鋼・電力など多角的に事業を展開し、一代で浅野財閥を築き上げた	（原本）国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
43	□	前田正名添状（林忠正宛） 半井栄「竹細工についての意見書」	明治31年(1898)4月14日	2	鹿児島出身の官僚・前田正名(1850～1921)が博覧会の出品作について、現愛媛県出身の官吏で新聞記者の半井栄の意見書を忠正に紹介する添状と、明治26年シカゴ万博でも大評判であった竹の出品を提案する半井の意見書。さらに半井は日本各地の竹細工産地の解説書を作成し、仏文に訳してはどうかとも提案している	高岡市美術館
44		前田正名肖像（写真）	〔生没年〕嘉永3～大正10年(1850～1921)	1	鹿児島県出身の官僚。慶応元年(1865)長崎へ藩費留学。明治2年フランスに留学し、同8年フランス公使館勤務。帰国後同11年、仏国博覧会事務官長となる。同17年『興業意見』を著し、殖産興業に努める。同21年山梨県知事、同22年農商務省工務局長等を歴任。同23年以後、全国を行脚し、地方産業振興運動等を推進、「布衣の農相」と評された。貴族院議員。男爵	（原本）国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
45	○	西園寺公望書簡（林忠正三兄弟宛）	明治31年(1898)11月6日	1	「最後の元老」・西園寺公望(1849～1940)から林忠正と2人の弟（長崎千里・萩原正倫）宛。パリに10年間留学歴のある西園寺は忠正らと親しかった。本書簡は、東京帝大法科大学を卒業した憲法学者・寛克彦がドイツに留学する際にパリを経由するので、その案内を依頼した紹介状。忠正がパリを訪れる日本人の「窓口」となっていたことがうかがえる	当館
46		西園寺公望肖像（写真）	〔生没年〕嘉永2～昭和15年(1849～1940)	1	京都府出身の公卿、政治家。徳大寺公純の次男。2歳の時、西園寺師季の養子となる。明治15年には伊藤博文らと憲法調査に随行し渡欧、パリの忠正とも交流を深めた。明治39年首相となり、以後桂太郎と交代で政権を担当し、桂園時代とよばれた。その後、最後の元老として大正末期から昭和初期にかけて、後継首相推薦の任にあたった	（原本）国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
47		林忠正三兄弟と西園寺公望（写真）	明治30年(1897)	1	パリにて撮影。左より忠正、長崎千里、萩原正倫、西園寺公望	（原本） 木々康子氏蔵
48		林忠正書簡（大隈重信宛）（写真）	明治31年(1898)8月13日	1	忠正から佐賀県出身の政治家・大隈重信宛。忠正が同年8月8日パリへ到着し、同33年の第5回パリ万博準備のため、当地で万博関係者との面会のほか、会場での作品の陳列場所や方法等について準備を進めていることなどを伝えている	（原本） 早稲田大学図書館蔵
49		大隈重信肖像（写真）	〔生没年〕嘉永6～明治43年(1853～1910)	1	佐賀県出身の政治家。尊皇攘夷派志士として活躍。明治3年参議となって以降、大蔵省事務総裁、大蔵卿に就任。明治14年の政変で失脚。同15年立憲改進党を組織、東京専門学校(早稲田大学の前身)を創立。外相として条約改正に関与。同31年憲政党を組織、首相に就任した。同40年政界を引退したが、のち復帰。大正3年再び首相となる	（原本）国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
50	□	岩下清周書簡（林忠正夫人宛）	明治31年(1898)11月17日	1	岩下清周(1857～1928)は長野出身の実業家・政治家。忠正の親友であった岩下が林家の男子出生の報告を受け、忠正夫人・さと（里子）宛に送付した祝い状。この時忠正は万博の準備のためパリにいた	高岡市美術館
51		岩下清周肖像（写真）	〔生没年〕安政4～昭和3年(1857～1928)	1	長野県出身の実業家・政治家。商法講習所に学び、三井物産に入社してアメリカ、フランスに赴任。明治22年品川電灯を設立。同24年三井銀行に招かれ、のち大阪支店長を務める。同29年北浜銀行の設立に参画（同36年頭取就任）。豊田式織機等の経営にも関与。同41年衆議院議員。大正3年北浜銀行の破たんにより頭取を辞任。翌年背任横領罪で逮捕、起訴され、有罪となった	（原本）国立国会図書館蔵（同館HP「近代日本人の肖像」）
52	□	黒田清輝書簡（林忠正宛）	明治32年(1899)8月20日	1	黒田清輝(1866～1924)は鹿児島出身の洋画家で、忠正はパリの法律学校で学ぶ黒田に画家への転向を勧めた。東京上野の梅川楼での集まりについて忠正へ出席の旨を伝えたもの	高岡市美術館

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
53		黒田清輝肖像（写真）	〔生没年〕慶応2～大正13年(1866～1924)	1	鹿児島県出身の洋画家。明治17年法律を学ぶため渡仏。林忠正らの紹介で、ラファエル・コランに師事し、画家に転向した。帰国後の同29年「白馬会」を創設。同31年東京美術学校教授に就任。同40年文展を創設。同43年洋画家として最初の帝室技芸員となる。大正8年帝国美術院会員、同11年院長に就任。洋画の啓蒙・教育とアカデミズムの確立に尽力した。同9年貴族院議員。代表作に「読書」「舞妓」「湖畔」など	(原本) 国立国会図書館蔵(同館HP「近代日本人の肖像」)
54	□	安達謙蔵書簡（林忠正宛）	明治38年(1905)5月26日	1	安達謙蔵(1864～1948)は熊本出身の政治家。鹿児島県伊佐市の菱刈鉱山の支払残金延期の交渉について、忠正と浅野総一郎の意見により技師を派遣し、調査を行ったこと、また参考に隣の河内山鉱山は非常に有望であるなどと連絡している。実業家としての忠正の一面が垣間見られる	高岡市美術館
55		安達謙蔵肖像（写真）	〔生没年〕元治元～昭和23年(1864～1948)	1	熊本県出身の政治家。立憲同志会、憲政会、民政党の幹部。渡韓して明治27年『朝鮮時報』発刊。同28年漢城新報社長、同年閔妃殺害事件に関係して拘引される。同35年から衆議院議員に14回連続当選。逓相、内相等に就任	(原本) 国立国会図書館蔵(同館HP「近代日本人の肖像」)
56		徳川昭武礼状（林忠正宛）	〔明治期〕3月22日	1	水戸徳川家9代藩主・徳川斉昭の18男（徳川慶喜の弟）で、後の水戸藩知事・徳川昭武(1853～1910)から忠正宛。忠正から写真を送付されたことについての礼状。昭武は明治10～14年にパリに留学しており、その頃に忠正と親交があったとされる	木々康子氏
57		徳川昭武肖像（写真）	〔生没年〕嘉永6～明治43年(1853～1910)	1	水戸藩主徳川斉昭の18男。公家。慶応2年清水家を継ぐ。翌年徳川慶喜の名代としてパリ万国博覧会に赴く。引き続きフランスで留学生活を送るが、明治維新のため急遽帰国し、最後の水戸藩主となる。明治9年にはアメリカ大博覧会御用掛として渡米し、再びフランスに留学。同14年帰国、以後長年にわたり明治天皇に奉仕した。晩年は茨城県で植林事業を行った	(原本) 国立国会図書館蔵(同館HP「近代日本人の肖像」)
58	□	徳富蘇峰書簡（林忠正宛）	〔年未詳〕8月15日	1	徳富蘇峰（猪一郎／1863～1957）は熊本出身の評論家・歴史家。忠正より蘇峰に依頼していた件について、蘇峰のほうは異存なしの旨を伝えたもの	高岡市美術館
59		徳富蘇峰肖像（写真）	〔生没年〕文久3～昭和32年(1863～1957)	1	熊本県出身の評論家・歴史家。熊本で大江義塾を設立。上京し、民友社を創設。『国民之友』・『国民新聞』を発刊し平民主義を唱えた。昭和17年日本文学報国会・大日本言論報国会会長、翌年文化勲章。同27年『近世日本国民史』100巻を完成させた	(原本) 国立国会図書館蔵(同館HP「近代日本人の肖像」)
60		『パリ・イリュストレ』（日本特集号）第45・46号 表紙カバー（写真）	明治19年(1886)5月1日	1	イラスト入り月刊誌で、忠正が高岡の実家にいる弟の長崎千里に送った。右側の墨書には全文フランス語の本文執筆、及び掲載した錦絵の選別などの編集レイアウトを忠正が行い、25,000部を印刷し完売したとある。右の英泉の花魁図は忠正が反転したが、翌年ゴッホがこれと同じ図を描いている	(写真提供) 高岡市美術館
61		『パリ・イリュストレ』（日本特集号）第45・46号	明治19年(1886)5月1日	1	イラスト入り月刊誌。本誌は第45・46合併号で「日本特集号」（全24頁）。忠正が執筆・編集も担当。初めてフランス語で日本の歴史文化等を紹介したもの。内容は歴史、気候風土、宗教、ハラキリ（切腹）、日本人の性格、衣服、習慣、芝居など13項目を紹介している	木々康子氏
		『パリ・イリュストレ』（日本特集号）より葛飾北斎画《富嶽三十六景 甲州三島越》（写真）		1	江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎(1760～1849)が描いた《富嶽三十六景 甲州三島越》。「三島越」とは甲斐（山梨県）から籠坂峠を越え、御殿場を経て駿河国（現・静岡県三島市）へと抜ける鎌倉往還（現・国道138号周辺）のこと	(原本) 木々康子氏蔵
		『パリ・イリュストレ』（日本特集号）より喜多川歌麿画《台所美人》（写真）		1	江戸期の浮世絵師・喜多川歌麿(1753～1806)が描いた《台所美人》	(原本) 木々康子氏蔵
62	○	『パリ・イリュストレ』全16号合本	明治19年(1886)1月～同20年4月	1	イラスト入り月刊誌。本資料は第40～61号までの全16冊の合本（41・42号、45・46号（日本特集号）、48・49号、52・53号、54・55号、56・57号は合併号／96頁）。裏表紙には「PARIS ILLUSTRÉ／2」とある	当館
63		Paul Renouard デッサン版画展カタログ	明治27年(1894)	1	パリで忠正が開いたルヌアールデッサン版画展のカタログ。カタログ冒頭に忠正の序文が掲載されており、これらの作品は東京に開く西洋美術館に展示されるものと予告している	木々康子氏
64	○	葛飾北斎画《東海道五十三次 絵本駅路 鈴 十七 由井》	文化年間（1804～18）	1	江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎(1760～1849)画。版元・伊勢屋利兵衛。《東海道五十三次》は江戸期に整備された五街道の一つ、東海道（江戸－京都間）にある53の宿場を描いたもので、本図は同作の「絵本駅路鈴」シリーズの17作目。本図には優れた浮世絵であることを示す「林忠正」印がある	当館 (佐伯孝夫氏寄贈)
65	○	『Histoire de l'Art du Japon』（日本美術史）	明治33年(1900)	1	忠正が民間人初の事務官長を務めた第5回パリ万博で最も力を入れた「日本古美術展」の大型図録（忠正監修）。浮世絵だけではなく日本美術の伝統の深さと水準の高さを世界にアピールした。全文仏語（日本語版は翌年出版）。295頁	当館
66	□	『Histoire de l'Art du Japon』（日本美術史）送り状		1	忠正から仏軍カピオモント大佐へ送付した『日本美術史』の送り状。忠正の署名がある。同書は各国の皇帝・政府・学者・博物館・美術館などに寄贈された	高岡市美術館

No.	※	資料名称	年 代	点数	備 考	所蔵先
67		有栖川宮威仁親王肖像（写真）	〔生没年〕文久2～大正2年(1862～1913)	1	有栖川宮熈仁親王の第4王子。明治11年兄の熈仁親王の継嗣となり同宮第10代を継承。同30年6月伊藤博文・西園寺公望・曾禰荒助（駐フランス全権公使）ら高官とともにパリへ赴き、忠正から1900年パリ万博についての「意見書」を受け取る（11月、忠正の事務官長就任が内定）。海軍に入り西南戦争、日清・日露両戦役にも従軍、同37年海軍大将に累進した。大正2年52歳で死去。同年7月7日元帥。王子の裁仁王が早世しており、有栖川宮家は断絶した	－
68	○	『1900年パリ万国博覧会日本館パビリオン』	明治33年(1900)	1	1900年の第5回パリ万博での日本館パビリオンの石版画。フランスの新聞「Supplement illustre du Petit Journal」に掲載	当館
69	○	パリ万国博覧会パンフレット	明治33年(1900)	1	1900年の第5回パリ万博パンフレット。忠正が高岡の実家・長崎家に送ったもの。表紙右側には「時節後レナレトモ去ル大博覧会ノ有様」と忠正と思われる墨書がある	当館
		パリ万国博覧会パンフレットより「LE PONT ALEXANDRE III」（アレクサンドル三世橋）（写真）		1	フランスの首都・パリを流れるセーヌ川に架かる橋「アレクサンドル三世橋」を描いたもの。この橋は、最後のロシア皇帝ニコライ2世が、当時のフランス共和国大統領サディ・カルノーと、父で先代の皇帝アレクサンドル3世の間に結ばれた友好の証として1900年のパリ万博にあわせて建設された。パリで最も美しい鉄橋とも言われる	当館
		パリ万国博覧会パンフレットより「LE GRAND PALAIS」（グラン・パレ）（写真）		1	フランスのパリ・シャンゼリゼの南側にある建築物「グラン・パレ」を描いたもの。中央にガラス張りの丸屋根をもつ。1900年のパリ万博会場として、「プティ・パレ」（現・パリ市立美術館）とともに建てられた。現在は科学博物館・美術館があるほか、イベント会場としても使われている	当館
		パリ万国博覧会パンフレットより「LE PETIT PALAIS」（プティ・パレ）（写真）		1	フランスのパリ・シャンゼリゼの南側にある建築物「プティ・パレ」を描いたもの。1900年のパリ万博会場として、「グラン・パレ」とともに建てられた。現在は「パリ市立美術館」になっている	当館
		パリ万国博覧会パンフレットより「LE QUAIS」（レ・ケ）（写真）		1	フランスのパリ・セーヌ川沿いの風景を描いたもの。左奥にはエッフェル塔（1889年建設）が描かれている	当館
		パリ万国博覧会パンフレットより「L'INTERIEUR DU GRAND PALAIS PENDANT LE SALON DE BEAUX-ARTS」（グラン・パレ内での美術展覧会）（写真）		1	150年以上の歴史を持つ美術団体「ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール」が主催する美術展覧会の様子を描いたもの	当館
70		パリ万国博覧会記念メダル（M,T,HAYASHI Commissaire général du Japon）	明治33年(1900)	1	1900年の第5回パリ万博の記念メダル	木々康子氏
71		レジオン・ドヌール（コマンドール）勲章	明治33年(1900)	1	1900年の第5回パリ万博の後、フランス政府から忠正に授与されたフランスの勲章（コマンドールは3等）。忠正は他に教育文化功労章2級(1894年)・1級(1900年)や、翌年日本政府から勲4等旭日小綬章も受賞している	木々康子氏
72		レジオン・ドヌール勲記（写真）	明治33年(1900)	1	1900年の第5回パリ万博後に勲章とともに贈られたもの	（原本） 木々康子氏蔵
73	○	『展覧目録』（林忠正旧蔵品売立目録）	年未詳（1929年頃か） 10月15日入札	1	目録冒頭に「故林忠正氏の遺物について依頼を受けてこの目録の書画道具の入札を催す」とある。会場は福井楼（日本橋区高砂町）で10月13～14日が下見、15日が入札ならびに開札。日本古美術品1,478件が掲載。非売品	当館
74		檜原北悠作《林忠正胸像》樹脂原型	令和7年(2025)	1	高岡在住の彫刻家・檜原北悠氏が手掛けた林忠正胸像の樹脂原型。制作・林忠正銅像制作委員会。本樹脂原型をもとに制作された銅像は、令和8年4月5日に除幕式が行われ、高岡市美術館パティオ（中庭）に設置された	当館（林忠正銅像制作委員会寄贈）
75		林忠正関連文献		14		当館

・資料名に「●」を付した書簡の翻刻（解読文）は、太田久夫・仁ヶ竹亮介編『林忠正等書簡（翻刻）』（桂書房、令和4年）に掲載されています。同様に「◎」資料の翻刻は、木々康子・高頭麻子編著『美術商・林忠正の軌跡 1853～1906』（藤原書店、2022年）に、「○」資料は当館収蔵資料D B（文化遺産オンライン）に、「□」資料は当館HPに掲載されています。

・資料保存のため一部展示替えをすることがあります。本リストの内容は実際の展示と異なる場合があります。

計75件111点